

前田本『枕草子』のために(二)

金井利浩

〈キーワード〉 枕草子 前田本 諸本論 汎諸本論 再構成本

本稿は、前稿「前田本『枕草子』のために」(本誌第三四号、二〇二二年三月発行)の続稿である。

旧来の『枕草子』諸本論において不当に冷遇されてきた(としか考えられない)前田本の、該論によつては説明のつかぬ、もしくは該論の論理を裏切る諸段を、前稿にひきつづき汎諸本論の視座から、また、堺本のみか前田本こそ再構成本であると推断し得る可能性を手放さない立場から、取りあげてゆく。

〔凡例〕

- 一、本文は、尊経閣叢刊丁卯歳配本『前田本枕草子』(育徳財団、一九二七年)に拠り、次のような方針によつて翻刻する。
- 1 仮名は現在におこなわれる字体により、漢字は常用漢字表にあるものについてはその字体を使用する。
- 2 段落を切り、句読を加点する。
- 3 会話の箇所は「」でくくり、会話文中の会話は「『」でくくる。
- 4 仮名には必要に応じて漢字を当て、もとの仮名は読み仮名(ふりがな)のかたちで残す。なお、その仮名が歴史的仮名遣いと相違する場合には、その仮名の直下に()でそれを補記する。
- 5 漢字には、必要に応じて読み仮名を()に入れて付す。また場合により、漢字を仮名に開き、もとの漢字を傍記する。
- 6 漢字が動詞の場合、適宜、送り仮名を補い、その仮名の右傍に圏点(・)を付す。
- 7 当て字の類は、一般におこなわれる表記に改め、もとの当て字はふりがなの位置に残す。

8 仮名遣いは歴史的仮名遣いに改め、底本のありようはふりがなの位置に残す。

9 語の清濁については、近年の研究成果を参照して、これを区別する。

10 反復記号「　」「　」は適宜仮名に改め、当該の記号はふりがなの位置に残す。

二、通釈は、本文の意味するところを現代日本語表現をもつて示す。

五 前田本を読む／前田本で読む／二三九・二四〇段の場合

二三九

【本文】

すべて、内裏^内わたりのやうによき宮仕^{づか}へ所^{どころ}はなし。たのもしく、めでたきをばさるものにて、ただすずろにはづかしく、をかしきことぞかぎりなきや。殿^{どの}はら宮仕^{みやづか}へは、君一^{ひと}所^{ところ}をこそは見たてまつれ。関白殿^{関白}ばかりをこそは、殿上人^{どのうぢ}つねにまゐりまかづるところはあめれ。されど、とたちかうたち、よしめきやはする。ただ見参^{まけん}ばかりにてうるはしだちてこそあめれ。

家ひとつにかしこきものにする上達部^{じやうたつ}をはじめ、殿上人^{どのうぢ}、それよりも受領^{うけりやう}なにくれまで、内裏^{うち}へまゐるをばいみじきことにしてこそ心づかひしためれ。我^{われ}よりもまさりたる君達^{きんだち}・おもと人たちのに言^いひ交^あはし、もてなしたるさまぞ、かぎりなきや。かく言^いへば、あたらむ人は、人^{ひと}なめくやあらむ、それで、いとあしかるべき。さる人は、いと見苦^{みくる}しきことなり。局^{つぼね}などは、繕^{つくろ}はまほしきところあれば、内裏造^{うちつく}り召^めして、よろづ心に任せ

【通釈】

およそ、内裏のように佳い職場は他にない。心強く、美しいの言うまでもなく、とにかくただただ気後れしてしまうくらいに立派で、すばらしいことこの上ないのだ。殿方への出仕は、その主人一人だけを見申し上げる。関白様のお邸だけは、殿上人が絶えず出入りするという点はあると思われる。ただし、とにかく入れ替わり立ち替わりで、上品なようすには見えない。わずかに拝謁のときにだけ生真面目なようすをする^{と見える}。

家を挙げてかけがえない存在としてあつかう上達部をはじめ、殿上人、それ以下の受領や何やかやまで、内裏へ参ることを最も名譽なこととして腐心しているようである。自分よりも優れている良家の子女や侍女たちのに臨んで言葉を交わし、振る舞っているようすといったら、並ひとつおりではないのだ。

こんなふうと言うと、これに該当する人は、失礼なことと感ずるであろうか、だとしたらそれこそ、きわめて良否の判断が悪かろう。そういう人は、実に見るに堪えないのだ。局などは、修繕したいところがあると、宮大工を召して、万事につけその大工の思いに任せて造らせておいて、

て造らせつづ、すべて何事も言ふべきにぞあらぬや。月の明か
さも、世の中よなかのところところに似ず。雪、はたさらなりや。

いっさい何事も口を出すべきではないのだ。月の明るさも、世間一般の
ところとは比べものにならない。雪、これもまた言うまでもないのだ。

まず、三巻本・能因本には、本段に対応する章段がないことを確認しておく。したがって、異同については、おのずと堺本は〔二三三〕
本文との間のそののみが問題になるのだが、それらは小異に見えて、ゆるがせにできない要素を含み持っている。

4行目の「：ばかりをこそは」を、堺本は「：ばかりこそは」ないし「：ばかりこそ」に作る。「：をこそは」との語法がなめら
かには通用しなくなった時代の、もしくは、直前にも同様の言い回しがあることを避けようとしての、いずれにせよ恣意的な改変と
見られる。

また、7行目「内裏へまゐるをば：」の「へ」が、堺本では「に」である。『枕草子』における「：にまゐる」と「：へまゐる」
とは截然と使い分けられていると見られ、いま仮に三巻本③にしたがえば、

新らしうかよふ婚の君などの、内裏へ、まゐるほどをも心もとなう…〔二三〕

斉信の宰相の中將の御棧敷へ、まゐりたまひしこそいとをかしう見えしか。〔二二三〕

賀茂へまゐる道に、…〔二二二〕

「…ただいま召せば、とみにてうへへ、まゐるぞ。…」〔二九六〕

と、〈方向〉を表す場合には例外なく「へ」が用いられるのである。よって、ここも、前田本のありようが支持されるべきであると
言えよう。

さらに、8行目の「：君達・おもと人たちのに言ひ交はし、もてなしたるさまぞ：」の「：のに」を、堺本は「：のやうに」と伝
えている。一見、文意なめらかなようだが、その実、前後の文脈を繋ぎ得まい。ここは、いづれ「内裏へまゐる」とする男たちが、「君達」
や「おもと人たち」を相手に、いわば実践モードでのスキルアップを図っている姿を描いているのであって、前田本の「の」は、い
わゆる準体法であり、意味するところは「君達・おもと人たちの」言葉動作ことばのうごきであり、それを直後の「言ひ交はし、もてなしたる：」
がそのまま引き取ることになる行文である。堺本の「：やうに」は、そうした行文であることを読み解けなかった書写者ないし編者
が恣ほしにした表現であると見てよいだろう。

加えて後ろから4行目、「局などは」の「は」を、堺本は「の」に作る。むろんそれでも文意は通るが、ここは、「局などは」と取り立ててこそその文脈であろう。またも堺本の恣意が想われるのである。

次段〔二四〇〕も見ておこう。

〔二四〇〕

【本文】

五節のころ、御仏名のをり、臨時の祭の試楽など、その日の御物忌にあたりたるには、上達部などもみなこもりたまへるなかに、ただこの正月まで頭なりつる人の、宰相になりて宿直めづらしくなりたるが、「昔にかはりたるを、いかが」など、主殿司して消息せさせて、細殿に立ち寄りなどしたるも、朝夕に目馴れしをりよりはやむごとなくおぼゆるこそ、うちつけなれ。

御前のこと果てぬれば、上達部も殿上人もみなおしこりて、もの言ふ言ふに出でぬるこそ、うらやましけれ。なごりなくさうざうしきに、留守の上達部の、あたらしき藏人はかりを具してゆるぎありくこそ、わがやうにや思ふらむとおしはかられて、いとほしけれ。

本段についても、三巻本・能因本には対応する章段がない。堺本は〔二三四〕がこれに対応し、ほぼ同文だが、前段と同様、小異が散見される。

3・4行目、「…たるが」が、堺本では「…たるぞ」、「…かはりたるを」が「…かへりたるを」、「…せさせて」が「…させ

【通釈】

五節のころ、御仏名るとき、臨時の祭の試楽など、その日が御物忌にあつた場合には、上達部などもみな引きこもっていらつしやるなかで、ついこの正月まで藏人頭であつた人で、参議になつたことで宿直がめつたになつた人が、「以前のようになつてお目にかからなくなつたので、どうお過ごしかと思ひまして」などと、主殿司に取り次ぎをさせて、細殿に立ち寄りなどしたのも、朝に晩にと見馴れていた頃よりはむしろ捨ておけない気持ちになるとは、現金なものである。

御前の儀式が終わると、上達部も殿上人もみなこぞつて、こちらがあれこれ話しているうちに出ていってしまうのは、妬ましい。がらんとして心さびしいなかで、留守役の上達部が、新任の藏人だけを連れて偉そうに歩きまわっているのは、我が物に思っているのであらうかと推察されて、気の毒である。

て」であるのはそれとしても、後ろから4行目、「もの言ふ言ふに」を「ものいみに」に作るのは、やはり、堺本の恣意的な改変ではあるまいか。「忌み違へに出づ」なら分かるが、「物忌に出づ」は不審とせざるを得ない。

また、結尾の「わがやうにや」以下が堺本には「わかやかにやおもふらんとをしはかられてをかしけれ」とあって、これは言うまでもなく見過ごしにできない大きな異同である。前田本の伝える「わかやう」を解し得なかつたか、もしくは「う」(字母「宇」)を「か」(字母「可」)に見誤ったか、いずれにせよ「わかやか」との文字列ないし語彙が生起せしめられ、それにつられてであろう、掉尾も帳尻合わせよろしく、「いとをしけれ」が「をかしけれ」へと転訛するほかなかつた、それこそが堺本本文であつたと見るのだが、いかがであらうか。

かく、右の両段における異同のありようをとおして見えてくるのは、語彙・語法の如何、あるいは文意通行の可否ないし滑・不滑といった点において、前田本本文に対する堺本のその劣位は明らかである、ということである。旧説が唱えつづけてきた、前田本が堺本を参照したという把握を、とうてい容認することのできない事象がそこにはある、ということである。

諸本論における前田本／堺本の位置づけなり関係性なりは、やはり再考されてしかるべきである、そう前稿で述べたところをいま一度くり返しておきたいと考える所以である。

六 前田本を読む／前田本で読む（二四五段の場合）

（二四五）

【本文】

人は、をとこもをんなも、よろづのこと事よりもまさりてわろきものは、言葉ことばの文字もじいやしう使つかひたるこそあれ。ただ文字一つに、いやしうもあてにもなるは、いかなるにかあらむ。さるは、かう思おふ人、よろづのことにすぐれてもえあらじかし。いづれをよきあしきとは知るにかあらむ。さりとも、人を知らしじ、

【通釈】

人は、男でも女でも、何よりもまさつてよろしくないのは、会話の言葉遣いが下品になつてゐることである。使う言葉わずか一つで、下品にも上品にもなるのは、どういふことなのであろうか。とはいへ、そう思つてゐる人間が、万事において他より秀でてゐるとは言へまい。何をもちつて良い悪いとは弁わえるのであるうか、決して自明自在ではあるまい。しかし、たとえそうであつたとしても、人はさておき、もつぱら本人がど

たださうちおほゆるをも言ふめり。

なになにを言ひて、「そのことさせむとす」と、「言はむとす」と言ふを、「とす」といふこと、文字を失ひて、ただ「言はむずる」「里へ出でむずる」と言へば、やがてわろうなりぬ。まいて、文に書いては、言ふべきにもあらず。物語などこそ、あしう書きなしつるは言ふかひなく、作り人さへいとほしけれ。「なほす定」「本のまま」など書きつくる、いとくちをし。「ひてつ車に乗りてし」と言ひし人もありき。「もとむ」といふことは、みな人言ふめり。

いとあやしきことを、をとこはわざとつくるはで、ことさらに言ふは、あしからず。わが言葉にもてつけて言ふが、心おとりするなり。

本段は、「男も女もよろづの事まさりてわるきもの」に始まる能因本は「二六二」がほぼ同文を伝え、堺本には相当する章段が無く、三巻本では「ふと心おとりとかするものは」と始まる「一八八」に重なるところがある、と言つてよいのだが、他方で、前田本自体内において、次に掲げる章段との「重複」が言われている。

【一六四】

【本文】

ふと心おとりして、わろくおほゆるもの。

ことばわるく、こわづかひあやしき人の、いやしきことも、

さは知りながらことさらにいひたると見ゆるは、されど、さ

うしてもそのように感じてしまうことを口にするのだと思われる。

何かを話題にして、「そのことさせむとす（そのことをそのようにしようとする）」とか、「言はむとする（言おうとする）」とかと言つてところを、「とす」という言い方の、その言葉を省いて、ただ「言はむずる」「里へ出でむずる」と言つて、まるでみつももなくなつてしまふ。ましてや、それを手紙に使つてしまつては、お話にもならない。物語などもなれば、ことさら下卑たように書いてあるのはもうどうにもならず、作者その人までが困つたものに思われてくる。「なほす定」「本のまま」などと付記することになるのは、なんとも残念だ。「ひてつ車に乗りてし（同じ車に乗つた）」と言つた人もいた。「もとむ（手に入れる）」という言葉は、誰もが口にするようだ。

なんとも耳慣れない言葉を、男はことさら取りつくりはせず、わざと使うが、それは悪くはない。自分の言葉として使い慣れたふうを装つて口にするのが、幻滅をもたらすのである。

【通釈】

いっぺんに幻滅を感じて、よろしくなく思われるもの。

言葉づかいがよくはなく、話しぶりのあやしい人が、下品な言葉であっても、そうと知りながら取えて口にしたと感じられるのは、しかし、そ

しもあらず。我がもとといひつけたりけることばをなだらかに、ふとつづみもなくうちいひ出でたるは、あさましきわざなり。

また、さしもあるまじうおいたる人の、わざとつくるひ、ことさらびたるも、にくし。まさなくあやしきそら言を、年など大人なる人は、つづみもなく言ひたるを、若き人は、いみじうかたはらいたきことに、消え入り思ひたるこそ、さるべきことなれ。

れほど悪くはない。わたしが以前から言い慣わしてきた言葉をべらべらと、そのまま遠慮もなく口に出して言うのは、あきれるばかりのふるまいである。

また、信じられないくらいに年を重ねた人が、ことさらに言いつくろい、わざとらしくふるまっているのも、見苦しい。思いもかけないようなよくない嘘を、年など重ねた古参の女房は、あけすけに口にしたりにしているのを、新参の者たちは、ひどくきまりが悪いことと、そわそわして感じているというのは、当然のことである。

〔二四五〕に対してこちらは、こんどは堺本〔二三六〕がほぼ同文を伝え、能因本には対応する章段が無く、一方で三卷本の〔二八八〕にはやはり重なるところがあるという諸本のありようのなか、さて、前田本が負の評価としての「重複」というレッテルを貼られたのは那邊であったかといえ、いま傍線を施した〔二四五〕掉尾の段落の表現と〔一六四〕標目ならびに直後の段落のそれとであった。なるほど両者は用いられた語彙も重なりを留め、主たる文脈も似通って、いかにも同工異曲の体ではある。しかるに、それぞれの段落にしかと就いてみれば、どちらかがどちらかを短絡的に援用ないし再利用したといった底のものではなく、それぞれに、それぞれの文脈を生きる表現と論理とを備えていることが明らかに知られるであろう。要するに、実質的にそこに「重複」は無く、片や、男女どちらであれ「よろづのことよりもまさりてわるきもの」をテーマにして「を」と「こ」の言葉の運用を腐し、片や、「ふと心おとりして、わろくおほゆるもの」を主題にして「人」の言葉の運用を難じるに際し、そこに生じていたかに見える表現の近接・類同は、むしろ清女の価値機軸・判断の不動一貫に因るものであることに想いを致してもよかつたはずなのである。

それにしても、そのような両段が、右でも触れたとおり一方では能因本と、もう一方では堺本と、ほぼ本文を一にしているという事実は、述べ来たった「重複」とする見方を助長しつつ、かの旧来の、前田本は底本たる能因本・堺本両々全部を解体し、両方を対照して、共通しない部分はすべて採用し、共通するところは一々判断して採択し稀に校訂を加え…と説き来たった定見を想い起させずにはないこともまた事実ではある。

その一方で、「重複」を強く押し立てていた山脇毅が、「この（稿者注…三卷本ノ〔二八八〕ヲ指ス）書出しも、本文と同様、前田本の両

段を下手にまとめたものではないかと思ふ。」と陳べていた。⁽⁹⁾三たび、これも事実である。

参考までに、三巻本の同章段を引いておこう。

【三巻本】〔一八八〕

ふと心おとりとかするものは、男も女もことばの文字いやしう使ひたるこそよろづのことよりまさりてわるけれ。ただ文字一つにあやしう、あてにもいやしうもなるはいかなるにかあらむ。さるは、かう思ふ人ことにすぐれてもあらじかし。いづれをよしあしと知るにかは。されど、人をば知らじ、ただここにさおほゆるなり。

いやしき言もわるき言も、さと知りながらことさらにいひたるはあしうもあらず。わがもてつけたるを、つつみなくいひたるはあさましきわざなり。また、さもあるまじき老いたる人、男などの、わざとつくるひひなびたるはにくし。まさなき言もあやしき言も、大人なるはまのもなくいひたるを、若き人はいみじうかたはらいたきことに聞き入りたるこそさるべきことなれ。

なにごとをいひても、「そのことさせむとす」「いはむとす」「なにとせむとす」といふ「と」文字を失ひて、ただ「いはむずる」「里へ出でむずる」など言へば、やがていとわろし。まいて、文に書いてはいふべきにもあらず。物語などこそあしう書きなしつればいふかひなく、作り人さへいとほしけれ。「ひてつくるまに」といひし人もありき。「もとむ」といふことを「みとむ」などはみないふめり。

読まれるとおり、冒頭の一文からして、「ふと心おとりするものは」と起こされた筆が、「∴使ひたるこそ」と逸れ、「∴わろけれ」で結ばれるそのありようは、いかにも不自然といえは不自然であり、また、形式段落ふたつめが、右掲出の前田本は〔一六四〕あるいはいま引用は節したけれども堺本〔一三六〕とほぼそっくり重なるのである。

このような本文こそ、山脇流に見れば「下手にまとめたもの」ということになるのであろうけれども、その「まとめ」られる前の章段を二つながら保持している前田本のような存在が現に在るといふ事実・実態そのものを認識しておくことが、先ずは重要である。そのうえで、逆に、三巻本〔一八八〕がいま見たような本文であればこそ、前田本〔二六三〕〔二四五〕の現に在るような位地や形姿・表現へと再編・再構成されていたのではと考量し得る余地を残しておくことが必要になってくるだろう。それほどに前田本の〔一六三〕〔二四五〕の両段はどちらも個的に首尾を備えて存立し、そこにある語彙も文も各章段の表現や論理を十全に支えな

がら位座して、言われてきたような「重複」からは遠く離れているのである。

その意味で少なくとも「二四五」は、前田本を能因本と堺本との合成本であると無批判に極めつけ枠取ってしまうことの危険性、また、前田本を再構成本であると位置づけ得る可能性、その両々に常に想いを致しておくことの大切さを教えてくれる、そのような意義を持った章段であることを、すべからず記憶にとどめておきたい。

七 前田本を読む／前田本で読む／二六六段の場合

さて、「二四五」と同様に、「重出」部分のあることをもって評価を毀なってきた章段が他にもある。

【本文】

道心あるは、いとよきことなれど、説経する寺・坊に、俗の常の人のやうにさだまりゐたるこそ、あまりうたて、この罪人の心に覚ゆれ。

藏人なりし人は、おりてのち、内わたりなどに常に見ゆるをば、わるきことにぞしける。されど、さまでは、あまりごとなり。このごろのこととしては、それしもぞ、藏人の五位とていそがしく追ひつかふめれば、いづくにもいろひで見ゆる。されど、なほ心ひとつはありしならひのつれづれなる心地しためればにや、さやうのところへも行くを一たび二たび来初めぬれば、常にまうでまほしくなりていくなめり。夏なども、いと暑きにも、帷子あざやかにて、薄二藍の指貫、もしは青鈍など踏

【通釈】

信仰心があるのは、とてもよいことだけれど、説法のおこなわれる寺や僧坊に、在俗の人が常連のように決まって詰めているというのは、あまりに嘆かわしく、この私のような罪深い人間の心には思われる。

藏人であった人は、退職後、宮中などでしじゅう見られるのを、感心しないことと考えたものだ。けれども、そこまで考えるのは、行き過ぎである。近ごろの状況としては、ほかでもないそういう人を、藏人の五位と称して忙しく頻繁に使うようなので、どこでも関与しているように見えるのだと思われる。そうではあるけれど、やはり心だけは在職時には多忙のなかであった常の時間を手持ち無沙汰なものに感じているということなのであろうか、まさにそうした説法の場合へ出向くことを一、二度始めてしまうと、しよっちゅう参詣したくなっていくようである。夏などでも、ひどく暑くても、帷子を目立たせ、薄い二藍の指貫、もししくは青鈍のそれを蹴り広げて、烏帽子に物忌みの札を付けているのは謹慎

み散らして、烏帽子に物忌み付けたるは慎むべき日にこそはあらめ、されど、功德のかたには、憚らぬと見えむとにや、いそぎ来て、そのところの聖と物語し、それが身およばぬところの事まで行なひ、車立つることをさへ見入れなどして、ことにつきたるけしきなり。

さるほどに、また久しく会はざりける人などまゐりあひたれば、またそれめづらしがりて近く居寄り、もの言ひ、うなづきつつ、をかきことなど語り出でて、扇広うひろげて口におほひて笑ひ、装束よくしたる数珠かひなにかいまくりて手まさぐりにし、すがりをもの言ふ拍子にこなたかなたうちやり、立たる車のよしあしほめそしり、「なにがし寺にてその人のせし八講、くれがしの所にて経供養せしをり、とありしか、かかりしか」など言ひあたるほどに、この説経をば聞きも入れず。なにかは、常に聞くことなれば、耳馴れてめづらしくぞあらぬにこそあらめな。

さやうにはあらで、講師みてしばしあるほどに、先追ふ車の音するを、過ぐるかと思ふに、「ここにどどめておるるを見れば、蟬の羽よりは軽げなる直衣・指貫姿なるも、あざやかになまめかしきさまどもにて、侍のきたなげなき三、四人具して入れば、はじめよりあかたまりたる人びとも経営し、さわぎ、所あけてすうるこそをかしけれ。高座のあたり近き柱のもとなどにあて、いと謹厚に伏し拝みなどはせねど、をかしげなる数珠おしもみ

しなければならぬ日ではあるのだから、が、善行を積む方法としては、物忌みも気にはしないと人に見せようというのであるうか、急いでやって来て、そこにいる僧と雑談し、その手のまわらない事柄まで執り行なったり、婦人の車を庭に立てることにまで世話を焼いたりなどして、物事万般に手慣れているようである。

そうしているうちに、ほかに長らく会わなかつた人が偶然にも参りあわせると、こんどはそれを珍しがって座を近づけ、話し込み、しきりにうなづき、気の利いたふうのことを次々に話題にしては、扇を広くひろげて口にあてがって笑ったり、立派に飾り立てた数珠を腕にぐるぐると巻き掛けて手慰みにし、何か言うのに合わせて房をこちらへあちらへと揺らめかしたり、停めてある車の良し悪しを褒めたり貶したり、「やれどこそこの寺で誰それが主催した八講は、やれどこそこの場所で催した経供養は、ああだった、こうだった」などと坐って話し込んだりしているの、その説法なぞ耳に入れもしない。いや何のことはない、いつも聞いている話であつてみれば、耳馴れて珍しくもないのであろうよ。

そのような藏人の五位とは違つて、講師が高座に坐つてしばらく経つたところに、先払いをする車の音がするので、通り過ぎていくかと思つていると、目の前で停めて誰やら降りるのでそれを見ると、蟬の羽よりも軽そうな直衣・指貫姿であるけれども、際だって美しく若々しい様子の人びとで、こぎれいな従者を三、四人ともなつて入ると、当初から集つて坐つていた人びともお世話し、せわしく動き、場所を空けて座を占めさせるのはおもしろい。高座の周辺近くの柱のところなどに坐つて、あまりつつしみ深く伏し拝みなどはしないけれど、風情のある数珠を揉みあわせて、上品な態度で耳を傾けるふうなので、講師の僧もおのずと光榮に思うのであろう、なんとかして後世まで評判になるくらいの説法をしたいものだ、幾度も声の調子をととのえたり、咳払いをしたりするそ

て、のどやかに聴くけしきなれば、講師も映え映えしう覚ゆるなるべし、いかで語り伝ふばかりのことも説き出でてしがないと、返すがへす声ひきつくるひて、うつしはぶきつつ、言ふことどもをしはしうち聴きて、あまり久しくもゐたらすと立ちさわぎ額づくほどにはあらで、よきほどに立ち出づとて、車どもの方など見おこせて、我どちもの言ふも、何事ならむと覚ゆ。見知りたる人は、をかしと覚ゆ、見知らぬ人は、誰にかあらむ、それにや、かれにやと思ひより、目をつけて見送らるること、をかしけれ。

「そこに説経しつ」「八講しけり」など人の言ひ伝ふるにも、「例の、その人ありつや」など言はれたるは、罪得事なれど、うたてくぞ覚ゆるかし。

おほかた、さるところに、むげにさしのぞかでもなどかあらむ、何事もしなしがらなり。

前田本「二六六」である。「重出」が指摘されるのは、その冒頭の三行、形式段落のひとつめを形成する第一文である。これが、次に掲出する章段の掉尾と重なってしまうとされるのである。

〔六三〕

【本文】

説経師は、顔よき。つとまもらへたるこそ、説くことのためとさも覚ゆれ。ほか目しつればつと忘るるに、にくげなるは罪や得らむと覚ゆ。このことばはとどむべし。すこし年などのよ

の一方で、人びとはしばらくはしっかりと聴いて、あまり長くは居つづけられないと騒ぎ立てたり額をつけて礼拝するといった大袈裟なことをしたりするのではなく、適当な頃合いを見はからつて引き上げるということ、立て並べた女車の方などに視線を送つて、お互い何か話しているのはどんな話題なのだろうとせんに思われる。誰それと知っている人については、その振舞がいいなとおのずと感心してしまうし、知らない人については、誰なのであろうか、誰それかしら、あの人かしらと想像がおよび、じつと注視して見送らずにいられないのは、おもしろいのだ。

「どこそこで説法があつた」「八講を催した」などと人びとが噂するにつけても、「いつものように、誰それさんはいましたか」などと言われているのは、こんなことを言うのは罰当たりだけれど、いかにも嘆かわしく思われるのだ。

総じて、そうした説法のおこなわれるところに、まったく顔を出さないというのもよくないだろうが、何事もそれに臨む態度や気持ち次第なのである。

【通釈】

説経師といえは、美男子の。ほかでもなく目が釘付けになっているのが、説く仏法のありがたさも感得できるというものなのだ。よそ見をしようとして説法の内容をふと忘れるので、顔のよくない説教師の場合は、

ろしきほどこそかやうの罪得がたのことは書きおけば、いまは、
いとおそろし。

また、たふときこと、道心多かりとて、説経すといふところに
最初に行きゐるたるこそ、なほ、この罪の心地には、さしもあ
らで、と覚ゆれ。

さて、諸賢、いかに読まれるであろうか。右〔六三三〕結尾の一文と〔二六六〕劈頭の一文とは、ほんとうにこれが「重出」であろうか。
表現をたどり直す要もあるまいが、前者では信仰心の篤さを逸早い行動を以て表そうとする者ないしその態度、後者では深厚な菩
提心の抱懷を説教の場に通い詰め入り浸ることで顕示しようとする者ないしその態度について、書き手は己れ自身ないし己れの性情
を罪深いものと自認しつつもそれらを評価の基軸にして、行き過ぎだ、嘆かわしい、と難じている。両段は、対象に対する書き手の
批評のありようにおいて軌を一にしながらも、その対象に据えられた態度の具体は微妙に相違し、何よりもそれぞれの段落において
有機的に配されており、決して軽率単純な「重出」などではないことを見届けておくべきだろう。

加うるに、その際、〔六三三〕では「また」で接いで「なほ」で転じる構文の盤石、〔二六六〕では「うたて」の語脈を宗とする首尾
の呼応の確かさを確認しておいてもよいだろう。

かくて卑見では、指摘され来たったような「重出」は存しないのだが、翻って、そもそもいわゆる雑纂本では、本文はいかようであ
つたのか、引いておきたい。

【三卷本】

〔三二一〕

説経の講師は かほよき。講師のかほをつとまもらへたるこ
そ、その説くことのためとさもおほゆれ。ひが目しつればふと
忘るるに、にくげなるは罪や得らむとおほゆ。このことはとど

こちらが仏罰を蒙るのであるかと思われる。いやいやそんな発言はや
めておこう。もう少し年齢的に許されるころならこんな罪を得るような
ことも書き残せようが、今となつては、とてもこわい。

一方で、説教は尊く有難いこと、自分は信仰心が篤いのだというわけ
で、説経があるという所に真つ先に行つて坐つていっているというのは、やは
り、私のこの罪深い料簡では、そうまでしなくても、と思われる。

【能因本】

〔三二九〕

説経師は、顔よき。つとまもらへたるこそ、説くことのため
とさもおほゆれ。ほか目しつれば、忘るるに、にくげなるは、
罪や得らむとおほゆ。このことはとどむべし。すこし年などの

むべし。すこし年などのよろしきほどはかやうの罪得がたのことは書き出でけめ、いまは罪、いとおそろし。

また、たふときこと、道心おほかりとて、説経すといふところごとに最初にいきゐるこそ、なほこの罪の心には、いとさしもあらでと見ゆれ。藏人など、むかしは御前などいふわざもせず、その年ばかりは内裏わたりなどには影も見えざりける、いまはさしもあらざめる。藏人の五位とて、それをしもぞいそがしうつかへど、なほなごりつれづれにて、心ひとつは暇あるこちすべかめれば、さやうのところによ、一度二度も聴きそめつれば、つねにまうでまほしうなりて、夏などのいと暑きにも、帷子いとあざやかにて、薄二藍、青鈍の指貫など踏み散らしてゐるためり。烏帽子に物忌つけたるは、さるべき日なれど、功德のかたにはさはらずと見えむとにや。

そのことする聖と物語し、車立つることなどをさへぞ見入れ、ことについたるけしきなる。ひさしうあはざりつる人のまうであひたる。めづらしがりて、近うゐより、ものいひうなづき、をかしきことなど語り出でて、扇ひろうひろげて、口にあてて笑ひ、よく装束したる数珠かいまさぐり、手まさぐりにし、こなたかなたうち見やりなどして、車のあしよしほめそしり、某にてその人のせし八講、経供養せしこと、とありしこと、かかりしこと、いひくらべゐたるほどに、この説経のことは、聴きも入れず。なにかは、つねに聴くことなれば、耳馴れてめづら

よろしきほどこそ、かやうの罪得方の事も書きけめ、今は、いとおそろし。

また、「たふとき事。道心おほかり」とて、説経すといふ所に、さいそにある人こそ、なほこの罪の心地には、さしもあらでと見ゆれ。

〔四〇〕

藏人おりたる人、昔は御前などいふ事もせず、その年ばかり、内わたりには、まして影も見せざりける。今は、さしもあらざめる。「藏人の五位」とて、それをしもぞいそがしくもてつかへど、なほ名残つれづれにて、心一つは暇ある心地すべかめれば、さやうの所にいそぎ行くを、一度二度聞きそめつれば、常に詣でまほしくなりて、夏などのいと暑きにも帷子いとあざやかに、薄二藍、青鈍の指貫など、ふみ散らしてゐたためり。烏帽子に物忌つけたるは、今日さるべき日なれど、功德のかたにはさはらず見えむとにや、いそぎ来て、その事する聖と物語して、車立つるをさへぞ見入れ、ことにつきたるけしきなる。久しく会はざりける人などの、詣で会ひたる、めづらしがりて、近くゐ寄り、物語し、うなづき、をかしき事など語り出でて、扇広うひろげて、口にあてて笑ひ、装束したる数珠かいまさぐりて、手まさぐりにうちし、すがりを物言ふ拍子にこなたに打ちやりなどして、車のよしあしほめそしりなにかして、その人のせし経供養、八講と言ひくらべゐたるほどに、この説経の事

しうもあらぬにこそは。

さはあらで、講師ゐてしばしあるほどに、前駆すこし追はする車とどめておるる人、蟬の羽よりも軽げなる直衣、指貫、生絹の単衣など着たるも、狩衣の姿なるも、さやうにて、わかうほそやかなる三四人ばかり、侍の者、またさばかりしていればはじめたる人人もすこしうち身じろぎ、くつろい、高座のものと近き柱もとにすゑつれば、かすかに数珠おしもみなどして聴きわたるを、講師もはえはえしくおぼゆるなるべし、いかで語りつたふばかりと説き出でたなり。

聴聞すなどたふれさわぎ、額づくほどにもならで、よきほどに立ち出づとて、車どものかたなど見おこせて、われどちいふことも、なにごとならむとおぼゆ。見知りたる人は、をかしと思ふ、見知らぬはたれならむ、それにやなど思ひやり、目をつけて見送らるるこそをかしけれ。

「そこに説経しつ、八講しけり」など人のいひつたふるに、「その人はありつや」「いかがは」などさだまりていはれたる、あまりなり。なかは、むげにさしのぞかではあらむ。あやしからむ女だにいみじう聴くめるものを。さればとて、はじめつきたばかりありきする人はなかりき。たまさかには壺装束などして、なまめき化粧じてこそはあめりしか。それに物詣などをぞせし。説経などには、ことにおほくも聞きざりき。このごろ、そのをりさし出でけむ人、命長くて見ましかば、いかばかりそ

も聞き入れず。何かは、常に聞く事なれば、耳馴れて、めづらしうおぼえぬにこそはあらめ。

さはあらで、講師ゐてしばしあるほどに、さきすこしおはする車とどめておるる人、蟬の羽よりもかるげなる直衣、指貫、生絹の単衣など着たるも、狩衣姿にても、さやうにては若くほそやかなる三四人ばかり、侍の者、また、さばかりして入れば、もとゐたりつる人も、すこしうち身じろぎくつろぎて、高座のものと近き柱のもとにすゑたれば、さすがに数珠押しもみ、さうに伏し拝みて聞きわたるを、講師もはえはえしく思ふなるべし、いかで語り伝ふばかりと説き出でたり。聴聞すると立ちさぎ額づくほどにもなく、よきほどにて立ち出づとて、車どもの方見おこせて、われどちうち言ふも、何事ならむとおぼゆ。見知りたる人をばをかしと思ひ、見知らぬはたれならむ、それにや、かれにやなど、目をつけて思ひやらるこそ、をかしけれ。

「説経し、八講しけり」など、人の言ひ伝ふるに、「その人はありつや」「いかがは」など、定まりて言はれたる、あまりなり。なかは、むげにさしのぞかではあらむ。あやしき女だにいみじく聞くめるものを。されど、この草子など出で来はじめつ方は、かちありきする人はなかりき。たまさかには、壺装束などばかりして、なまめき化粧じてこそありしか、それも物詣をぞせし。説経などは、ことにおほくも聞きざりき。このごろ、その書き出でたる人の、命長くて見ましかば、いかばかりそし

しり、誹謗せまし。

— 一り誹謗せまし。

見られるとおりである。能因本は二つの段に分かたれているが、校注者は〔四〇〕の見出しに、「田中重太郎氏の校本の段分けに従つて別段としたが、前段に続く。」と注を付しており、要するに雑纂本は、「説経」に係る一連なりの章段として形成・排置れていたと把握するのが至当と思しく、したがって前田本は、そのような雑纂本の冒頭5行目までとも8行目までとも言えるくだりを〔二六二〕とし、6行目からとも9（8）行目からとも言えるくだりを〔二六六〕として布置していたということになるのである。その意味では、その交叉する境目が「重出」として難じられたのも、むべなるかなと得心されはするものの、実質的にそれが「重出」にあたらぬこと、すでに述べたとおりであり、ここで繰り返し返す要はあるまい。

残るは、堺本である。前田本とともに類纂本の埒内に置かれる同本文は、さて、いかようであったか、引いてみよう。

【堺本】⁽¹⁾

〔二二〕

説経の講師は、顔よき。つとまもらるるほどこそ、説くことのたふときも聞こゆれ、ほかさまに向きぬれば耳にも入らぬ、罪の深さなれば、傍目^{あからめ}せじといりあたるに、にくさげなるも罪得^うる心地す。このことは、とどむべし。若き時こそかやうの罪深きこともよかりしが、老いてはいとおそろし。

〔二四一〕

道心あるは、ことよきことなれど、説経する寺・坊に、俗の常の人のやうにさだまりぬたるこそ、あまりうたて、この罪人^{つみ}の心には覚ゆれ。

藏人なりし人は、おりてのち、内裏^{うち}わたりなどに常に見ゆるをば、我がことにぞしける。されど、さまでは、あまりごとなり。このごろのやうとしては、それしもぞ、藏人の五位とていそがしく思ひ、つかふめれば、いづこにもいろひて見ゆめる。されど、なほ心ひとつはありしならひのなる心地しためればにや、さやうの所へも行くを一たび二たび来初^そめつれば、常に詣でまほしくなりて行くなめり。夏などのいと暑きにも、帷子^{かたびら}あざやかにて、薄二藍の指貫、もしは青鈍など踏み散らして、烏帽子に物忌み付けたるは慎

むべき日にこそはあらめ、されど、功德のかたには、憚らぬと見えむとにや、いそぎ来て、その所の聖と物語し、それが身およばぬところの事まで行なひ、車立つることをさへ見入れなどして、ことについたるけしきなり。

さるほどに、また久しう会はざりける人などまゐりあひたれば、またそれめづらしがりて近う居寄り、もの言ひ、うなづきつつ、をかききことなど語り出でて、扇広くひろげて口おほひて笑ひ、装束よくしたる数珠かひなにかいまくりて手まさぐりにし、こなたかなた見やりて、立てる車のあしよしほめそしり、「なにがし寺にてその人のせし八講、くれがしの所にて経供養せし折ありしが語りし」など言ひひたるほどに、この説経をば聞きも入れず。なにかは、常に聞くことなれば、耳馴れてめづらしくもあらぬにこそはあらめな。

さやうにあらで、導師あてしばしあるほどに、先追ふ車の音するを、過ぐるかと思ふに、ここにとどめておるを見れば、蟬の羽よりは軽げなる直衣・指貫着たり。狩衣姿なるも、あざやかになまめかしきさまどもにて、侍のきたなげなき三、四人具して入れれば、はじめよりかたまりたる人々も経営し、さわぎ、所あけてすうるこそをかしけれ。高座のもと近き柱のもとなどにあて、いと謹厚きんこうに伏し拝みなどはせねど、をかしげなる数珠おしもみて、のどやかに聴くけしきなれば、講師も映え映えしう覚ゆるなるべし、いかで語り伝ふばかりのことも説き出でてしがなと、返すがへす声ひきつくるひて、うつしはぶきつつ、言ふことどもをしばしうち聴きて、あまり久しくもあたらす、往生極楽と額づき、立ち騒ぐほどにはあらで、よきほどに立ち出づとて、車どもの方など見おこせて、我どち物言ふも、何事ならむと覚ゆ。見知りたる人は、をかしと覚ゆ、見知らぬ人は、誰にかあらむ、それにや、かれにやと思ひより、目をつけて見送らるるこそは、をかしけれ。

「そこに説経しつ」「八講しけり」など人の言ひ伝ふるにも、「例の、その人ありつや」など言はれたるは、罪得事つみえなれど、うたてう覚ゆかし。

おほかた、さる所に、むげにさしのぞかでもなどかあらむ、何事もしなしがらなり。

いかがであろうか。そう、堺本は、雑纂本系本文の始発部、右に引いた三卷本・能因本本文でいえば5行文を「三二」に、それ以降を「二四一」にと、雑纂本系本文をある意味では単純に分断し、そのままそれぞれの位置に配したと見てよいような体なのであった。むろん、「二四一」の冒頭には、雑纂本系本文との表現上の逕庭があるといえはあるわけだが、それは前田本「二六六」も同断であつ

て、ひとり堺本の成果達成であったとは言い切れまい。⁽¹⁵⁾むしろ、堺本「三二」が持ちあわせぬ、章段の後半の構えを「六三」でしか、見せておいて、そのうえでなお「二六六」冒頭の表現を可能にした前田本にこそ、そこに介したであろう章段構成への意識の厳存を認めるべきであろう。

果たして、前田本は「六三」と「二六六」とのあいだに指摘されてきた「重出」はそう呼ぶには当たらない、というよりも、「重出」と指摘されてきた正にそのくだりに、「重出」に墮すことなき表現を用意した前田本こそ、「再構成本」と呼んでおきたいと思う、いや、呼ばねばならないと考える所以である。

八 前田本を読む／前田本で読む／二七二段の場合

二七二

【本文】

人の従者は、主の思はむことを知らぬこそ、わびしけれ。懸想人にて来たるは言ふべきにあらず、さらねど、ただうち語らふ人も、わざとならねど、おのづから来などしたるに、簾の内に入びとあまたありてものなど言ふに、あつきて、とみに立ちげもなきを、供なる男ども・童などの、とかくさしのぞき、けしきばめるに、斧の柄も朽たしつべきなめり、むつかしければ、ながやかに、しめにあくびで、みそかにと思ひて言ふらめど、「あな、わびし。煩惱・苦惱かな。夜中にはなりぬらむかし」などつぶやき腹立つ声の聞こゆれば、いみじう心づきなし。かの言ふ者は、ともかくもおぼえず、このあたる人こそ、をかしと聞きつることどもも消え失するやうに、わろう思ひおとさるれ。

【通釈】

従者たるものは、主人の思っていることを弁えないとしたらそれこそは、困ったものだ。恋人としてやって来たの言うまでもなく、そこまではない、ほんの少し親しくことばを交わすといった程度の人でも、特にこれという事情があつてのことではないが、たまたま訪ねて来たりなどした際に、簾の内に女房が大勢いて何やら話したりなどしているの、坐りこんで、すぐに帰りそうもないのを、供の下男や童などが、いまかまかときりに中を覗き込み、帰りたいさうなそぶりをしてみるけれども、斧の柄も腐らせてしまいうくらいにまだ待たされるものと判断されて、むしゃくしゃして気もふさがるので、長々と、思い入れたつぷりにあくびをして、本人は誰にも聞かれていないと思つて言っているのだらうけれど、「ああ、つらい。悩ましくも苦しい目を見ることだなあ。もう夜中になつてしまったらうな」などとつぶやいて腹を立てた声が耳に入ってくると、ほんとうに不愉快だ。尤もその愚痴を言っている供人のことなどは、どうとも思ひはしない、それよりも目の前に坐っている他ならぬ主人こそ、すばらしいと聞いていた評判まで帳消しになるように、芳しからぬ方へと蔑まれるものである。

まして、冬の夜などは、いたく更け行くまに、「あな、寒」など高やかに歎くかし。また、さ色に出でてこそ言はねど、「あな、わびし」と高やかにうち言ひてうめきたるも、「下行く水の」といとはしくて、立部・透垣などのもとに寄り来て、「雨降りぬべし。いかがせむずる」など、おのがち言ふやうにて聞こえごち言ふなども、ただなるよりはにくし。

いかなるにか、いとやむごとなき人の御従者は、さもなし。また、君達のは、よろし。ただ人のぞ、多くさはある。あまたあらむ中にも、心はへよからむをぞ、選りて率てありくべき。

まず、本文5〜6行目の「けしきはめるに」だが、原文は「め」の右傍に「み」と小書する。惟みるに、「けしき見るに」との異文注記なのであろうが、いまは本行本文のままに従った。

さて、本段は、三卷本〔七〇〕、能因本〔七六〕がこれに対応する。総じて、章段の趣意に差異はないと見られるのだが、先ずもつて両本が、とはすなわち雑纂本が、劈頭の一文を持たぬという一点は指摘しておかねばならない。ならば、当該章段はいかに起ち上げられていたか、三卷本に代表させて〔六七〕からの配置・排列の様態を確認しておこう。なお、下段《備考》欄には、参考までに、萩谷朴のいわゆる隣接章段との連想の脈絡を掲げておく。

三卷本〔六七〕

おぼつかなきもの。

十二年の山籠りの法師の女親。知らぬ所に、闇なるに行きたるに、あらはにもぞあるとて、火もともさで、さすがに並みある。今出で来たる者の、心も知らぬに、やむごとなき物持た

まして、冬の夜ともなれば、たいそう更けてゆくにつれて、「ああ、寒い」などと、声高に歎くことよ。あるいは、そうはつきりと表情にまで出してこそ言わないけれど、「ああ、こまった…」と声を上げてふと漏らして溜息をついているのも、「下行く水の…(心の内には、言葉にはし得ぬつらい思いを湛えているのだろう)」と気の毒なありさまで立部や透垣などの近くまで寄つてきて、「雨が降りだしそうだ。どうしたものか」などと、仲間どうしで言葉を交わすような体で聞こえよがしに言うのなどは、何事もない場合以上に気に入らない。

どういわけか、格別に高貴な人のお供は、そういうことは無縁である。あるいは、名門の若君のは、まあ悪くはない。一般貴族のが、多くの場合そんなふうである。従者はたくさんいる中でも、心立てのよいのを、選りすぐつたうえで連れてまわるべきである。

《備考》

※萩谷朴校注『枕草子』(新潮日本古典集成、昭和五二年)頭注*印の欄に記された、章段内容を要約した小見出しと、「隣接章段との連想

せて人のもとにやりたるに、遅く帰る。ものもまだ言はぬちごの、そりくつがへり、人にも抱かれず泣きたる。

〔六八〕

たとしへなきもの。

夏と冬と。夜と昼と。雨降る日と照る日と。人の笑ふと腹立つと。老いたると若きと。白きと黒きと。思ふ人とにくむ人と。同じ人ながらも心ざしあるをりとかはりたるをりは、まことに異人とぞおぼゆる。火と水と。肥えたる人、痩せたる人。髪長きと短き人と。

夜烏どものゐて、夜中ばかりに、いね騒ぐ。落ちまどひ、木伝ひて、寝起きたる声に鳴きたるこそ、昼の目に違ひてをかしけれ。

〔六九〕

忍びたる所においては、夏こそをかしけれ。いみじく短き夜の明けぬるに、つゆ寝ずなりぬ。やがてよろづの所あけながらあれば、涼しく見えわたされたる、なほ今すこし言ふべきことのあれば、かたみに答へなどするほどに、ただ居たる上より、鳥の高く鳴きて行くこそ、顕証なるこちして、をかしけれ。

また、冬の夜いみじう寒きに、埋もれ臥して聞くに、鐘の音の、ただ物の底なるやうに聞ゆる、いとをかし。鶏の声も、はじめは羽のうちに鳴くが、口を籠めながら鳴けば、いみじうも深く遠きが、明くるままに近く聞ゆるも、をかし。

の脈絡」とを、そのまま引く。

〔第六八段〕 両極端 「おぼつかなきもの」を、相対的に類想したのに続いて、両極端に位置して比較を絶したものを組み合わせる類想する。

〔第六九段〕 後朝、夏と冬 前段に挙げた夏と冬の対比を、忍び逢う男女の後朝の情緒にあてはめて、その相違を類想する。

〔七〇〕

懸想人にて来たるは、言ふべきにもあらず、ただうちかたらふも、また、さしもあらねどおのづから来などもする人の、簾の内に人々あまたありてものなど言ふに、居入りてとみに帰りがけもなきを、供なるをのこ、童など、とかくさしのぞき、けしき見るに、斧の柄も朽ちぬべきなめりと、いとむつかしかめれば、長やかにうちあくびて、みそかにと思ひて言ふらめど、「あなわびし。煩惱苦惱かな。夜は夜中になりぬらむかし」など言ひたる、いみじう心づきなし。かの言ふ者は、ともかくもおぼえず、このあたる人こそ、をかしと見え聞えつることも失するやうにおほゆれ。

また、さいと色に出でてはえ言はず、「あな」と高やかにうち言ひうめきたるも、「下行く水の」と、いとほし。立葩、透垣などのもとにて、「雨降りぬべし」など、聞えごつも、いにくし。

いとよき人の御供人などは、さもなし。君たちなどのほどは、よろし。それより下れる際は、皆さやうにぞある。あまたあらむ中にも、心ばへ見てぞ、率てありかまほしき。

読まれるとおり、三巻本〔七〇〕が、〔六七〕からの章段の流れのなかにあつてみれば、前田本〔二七二〕のような劈頭の一文を擁する用の無きこと、容易に観て取れよう。

さて、これを、ある文言が前田本にはあつて三巻本にはないという事象として総体を通覧してみると、各所に指摘し得る。以下、

〔第七〇段〕 供を選ばば 第六十七段の従者論と第六十九段の後朝論とを習合して供侍ちの従者の態度の好悪を評し、その主人の人格に論及する。

主だったところを列記してみる。

7行目の「しめにあくびて」の「しめに」を、また、9行目の「腹立つ声の聞こゆれば」を、三巻本は持たない。ちなみに、前田本の「しめに」の「しめ」は、「思いを込める」意の「沁む」の連用形であろう。

11行目、「わろう思ひおとさるれ」は、三巻本ではこれを「おほゆれ。」と、端的に結んでいる。

12行目、形式段落二つめの冒頭の一文、「まして、冬の夜などは、いたく更け行くまゝに、『あな、寒』など高やかに歎くかし。」、これが三巻本には非在である。

後ろから7行目、「あな、わびし。」の「わびし」、同じく後ろから5行目の「いかがせむずる」、これらもまた、三巻本は伝えていない。その後の「おのがどち言ふやうにて聞こえこち言ふなども、ただなるよりはにくし」については、いかにも端的に、「きこえこつも、いとにくし」に作る。

掉尾の三行、起筆の「いかなるにか」も三巻本は持たず、「ただ人のぞ、多くさはある」については、三巻本では「それより下れる際はみなさやうにぞある」と、さらに、結尾の「…よからむをぞ、選りて率てありくべき」については、「…見てぞ率てありかまほしき」と、それぞれ伝えてある。

およそ以上のとおりである。卑見によれば、前田本の本文から三巻本の本文へと、いわば枝葉が削ぎ落とされたとは考えにくく、むしろ押さえるべきは、劈頭の一文をはじめとする表現の増益こそである、と考えるのだが、いかがであろうか。

要するに、前田本は、三巻本的なる本文を再構成してこの「二七二」に相当する本文をここに配置するにあたり、それを自立的に存立せしめるべく、^{テーマ}標目といってよい劈頭の一文を立てた、そう考えてみるのである。

なお、同じ類纂本でありながら、堺本「二四二」はさすがに総体こそ前田本と同断の本文を伝えるものの、始発の一文は、「ひとりずさは、しうのおもふらんことをしらぬこそわびしけれ。」と、文字列の差異は一見わずかだが、その実、意を捉えがたく変容している。

かくて、本段についても、前田本がそれを然るべく伝え来たった事実を多とし得るであろう。

〔注〕

- (1) 堺本が類纂にとどまらぬ、堺本による堺本のための本文を形成していることを根拠に、同本を「再構成本」と認称すべきであると説いた山中悠希『堺本枕草子の研究』（武蔵野書院、二〇一六年）の伝に拠ってよければ前田本もまた前田本としての本文を形成しており、紛れもなく「再構成本」と呼べようこと、拙稿『枕草子』を前田本で読むということ」（中央大学附属中学校・高等学校『教育・研究』第三三号、二〇二〇年三月発行）で述べた。参照されたい。
- (2) 「…する」は、原文「…す」。いま、文法に従って「る」を補う。
- (3) 以下、三巻本の本文ならびに章段番号は、田中重太郎著『校注 枕草子』（笠間書院、一九七五年）に拠る。ただし、傍点・傍線の類は、必要に応じて稿者が私に加えるものである。
- (4) この「なになにを」だが、原文は「なむなきを」に作る。三巻本は「なにごとむ」、能因本は「なんなき事を」と伝えている。もと、不定名称の「なに」を重ねた「なに〜」とあったものが、たとえば「何なに」や「なになに」といった書写過程を経たり、「なに」が「なき」と誤られたりなどして本来の形姿や意義を失ったと想定して、いま仮に「なになにを」との本文を立てた。
- (5) この「そのことさせむとす」は、原文「その事させんとすと、す」とある。いま、原態を斟酌して私に改めた。
- (6) この「なほす定」^事「本のまま」については、いったい諸注は「なほす」「定本のまま」と校定しているが、いかが。「定本のまま」と記し留められた実例を寡聞・管見にして知らない。いま、「なほす定」で、〈本文を改めた、これが定かである（これで確定である）の意を充足し得ると見ておく〉。
- (7) この「もとむ」といふことは、三巻本では「もとむ」といふことを「みとむ」^事「なんどは」である。むしろ、「もとむ」という言葉^事を皆が「みとむ」などと言うようになったらしいと、言葉の転訛を評したもので、前田本に誤脱あるかとも目されるところだが、いまそのままを尊重して解するならば、〈転訛〉ではなく〈転義〉に触れたもの、すなわち元来の「探す」ではなく新たな「手に入れる」の意で「もとむ」という言葉を既に誰もが使っているらしい、と陳べたものと捉え得まいか。もとより卑見だが、試みとして提示しておきたい。
- (8) 山脇毅『枕草子本文整理札記』（山脇先生記念会、一九六六年）は第五節（一〇〜一二頁）を参照されたい。
- (9) 注（8）所掲書一一頁。
- (10) 「坊」^{ばう}は、原文では「はら」と判読すべきかと思しい字体である。いま、「ら」を「う」からの誤写と見て、「坊」の漢字を当てた。
- (11) この「する」は、原文では「ふする」。「す（据）う」の連体形「する」が「すふる」と表記・書写され、さらに「す」と「ふ」とが逆転したのが現態であるうと推して、いま元に復した。
- (12) 能因本の本文ならびに章段番号は、便宜上、松尾聰・永井和子校注・訳『枕草子 一二』（完訳 日本の古典 第12・13巻、小学館、一九八四年）に拠る。
- (13) 松尾聰・永井和子校注・訳『枕草子 一』（完訳 日本の古典 第12巻、小学館、一九八四年）五七頁、脚注二二。
- (14) 堺本の本文は、吉田幸一編『堺本枕草子 斑山文庫本』古典文庫、一九九六年）に拠り、私に句読点を加え、適宜、仮名に漢字を当て、また仮名を歴史的

仮名遣いに改めるなど一般的な校訂を施して掲出する。ただし、章段番号は林和比古編著『堺本枕草子本文集成』（私家版、一九八八年）に拠る。

(15) 引いた〔二四一〕の後ろから6行目の「往生極楽と」などは、それこそ堺本の独自異文であるとはいえ、いかにも後人による補記・注記の本行本文文化したものであるかと思われる一方で、その表現が前田本に何ら影響を及ぼしてはいない現態に照らすとき、ここでもまた改めて、前田本を能因本と堺本との合成本であると無批判に極めつけてしまうことの非ないし危険性が思い合わされるのを禁じ得ない。